

保育現場の子育て支援における e-ポートフォリオの効果と導入可能性に関する研究

Investigative Research into the Effects of E-Portfolios on Child-Rearing Support
at Nursery Schools and Introduction of Feasibility Study

守 巧¹⁾ 松 井 剛 太²⁾

MORI, Takumi MATSUI, Gota

Abstract

本研究は、日本における e-ポートフォリオ実施の基礎資料とするべく、子育て支援における e-ポートフォリオの効果や課題の有無を明らかにすることを目的とした。e-ポートフォリオを実施している就学前施設とインターナショナルスクール（初等部）において、利用している保護者（父親・母親）へのアンケート調査を実施した。結果、保護者の閲覧頻度が低く、コメントの返信が少なかったものの、子どもとの関係性の変容や保育者とのコミュニケーションの促進が生まれていた。子どもの成長を感じていると答えた保護者は、74%と高値であることから、「活動を可視化し、それに対してコメントをする」というプロセスが生まれ、保護者が子どもの成長を実感できる循環が生まれていると考えられた。さらに、園（学校）での出来事について、「園（学校）の保育者・教諭と話す機会が増えた」の質問に、「やや変化があった」「変化があった」と答えた保護者は62%であった。このことからストーリーパークの利用によって双方のコミュニケーションが促進され、関係構築に好影響を与えたと推察された。

This research aims to elucidate the effects of e-portfolios on child-rearing, as supporting data for e-portfolio implementation in Japan, as well as the existence or lack of corresponding topics and themes. A questionnaire survey was conducted on guardians (mothers and fathers), who are users of e-portfolios, of children in preschools and international schools (primary level) that utilized e-portfolios. The results of this survey indicated that while the guardian viewing frequency and comment responses were low, communication with childcare workers was high and relationships with children were transformed. A high percentage of guardians (74%) answered that they could monitor progress and growth in their children. Given these results, it is thought that a process where “data are visualized and corresponding comments made” should be generated. This will allow guardians to consistently check their children’s growth and development. Furthermore, regarding the question prompt, “There has been an increase in opportunities to speak with the institution (school), childcare workers, and teachers,” 62% of guardians either responded that “changes had occurred” or “changes had occurred to a partial degree.” From these results, we can see that the usage of Storypark promotes mutual communication and positively influences relationship building.

キーワード：e-ポートフォリオ、子育て支援、保育者

I. 目的

2015年、社会的なニーズにこたえる形で子ども・子育て支援新制度が施行され、子どもの年齢や親の就労状況などに応じた多様な保育及び子育て支援の場が拡充して

いる。保護者にとっては、就労と子育ての両立のために子育て支援の選択肢が広がり、多様な支援が受けられることは望ましい状況といえよう。一方、子育て支援の充実が、保護者の意識に影響を及ぼすという意見もある。諏訪（2014）は、子育て支援の名のもとに、親の子育ての代行をするような支援になってはならないと警鐘を鳴らしている。すなわち、保護者の子育てにおける負担軽減を強調し、過剰な子育て支援をすることによって、保

1) こども教育宝仙大学 教授

2) 香川大学 准教授

護者の子育てに対する主体性が欠落しかねないといえるだろう。

保育所・幼稚園・認定こども園においても、保育者が保護者への子育て支援を日常的に行っている。ここでは、保育者と保護者、双方が子どもの保育や子育てに参画するという視点で相互に影響を与え、保育の質の変容や保護者と保育者が子どもを共に育てるといった関係性を構築していくことが推奨されている。そこには、「支援者（保育者）」と「被支援者（保護者）」という需給関係の図式ではなく、ともに主体となって子どもの育ちに関わるという関係性が重視される。

そのような関係性の中で、保育者と保護者がともに子どもの育ちを共有するための取り組みの一つとして、ラーニング・ストーリー（学びの物語）の活用が考えられる。ラーニング・ストーリーは、ニュージーランドで開発された保育アセスメントの方法であり、保育者と保護者が共同して子どもの育ちを記録するものである。具体的には、保育者が子どもたちの保育中の学びの様子を写真に収めて解説を加えた後、保護者にもそれを渡してコメントを書いてもらう。そうして作った記録を蓄積してポートフォリオの形にする。この制作過程の中で、保護者は保育者の子どもの見方や方法及び保育中の子どもの成長を知ることができる。そして、「保育者と保護者が子育てを共有し、ともに子どもの成長を喜び合う関係性が構築されていく」（橋川，2014）。

近年、海外では、それをパソコンやスマートフォンで作成・閲覧するソフトが開発・実施されている。我が国でも、保育者の負担軽減を目指し、保育現場におけるICTシステムの導入が活性化してきている。指導案や連絡帳の作成、あるいは登降園管理などをICTの活用で省力化し、導入されている（たとえば、株式会社コドモンによるICTシステム）。保護者との関係構築や支援に焦点を当てたものには、ニュージーランドで開発されたe-ポートフォリオ（ストーリーパーク²¹⁾がある。また、既に一部の園で実施されている。ストーリーパークは、ニュージーランドのラーニング・ストーリーのウェブ版である。これは、写真、ビデオ、テキストを投稿できるアプリであり、PC・タブレット、スマートフォンに対応しているため、保育者が投稿した内容を就労している保護者であっても勤務先などから閲覧し、コメントを投稿することが可能である。多忙な保護者であっても仕事の合間や休憩時間など、時間や場所を特定しない点で都合が良い面がある。そして何より、先述した子育てに参画するには、保護者からの投稿も欠かせない。ストーリーパークには、保護者がコメントできる欄が設けられており、子どもの姿を中心にした保育者・保護者の相互的な作成が促される記録になっている。e-ポートフォリ

オではないものの、ラーニング・ストーリーの制作過程において保護者による子どもへの肯定的な関わりが促されたとする研究もある（Carrら，2000）。さらに、制作過程において保育者・保護者の関係性の構築に大きく寄与するという報告もある（七木田・ダンカン，2015）。このように、ポートフォリオは、保護者と子どもを中心とすることで主体的・能動的な制作過程を経ることで子どもの成長を感じたり、肯定的なまなごしの視点を得たりするなど、導入のメリットが大きいと推察される。しかし、これまで子育て支援に寄与すると考えられ、かつラーニング・ストーリーに準じたe-ポートフォリオの導入にあたり、成果や課題を検証した研究は我が国ではほとんどない。

そこで、本研究では、e-ポートフォリオ（ストーリーパーク）を実施している就学前施設とインターナショナルスクール（初等部）において、利用している保護者（父親・母親）へのアンケート調査を実施する。保護者には、e-ポートフォリオの実施により、子どもへの理解、保育者・教諭と家族との関係性の変化、導入に際する課題などについて、量的な分析により検討する。これらの結果より、日本におけるe-ポートフォリオ実施の基礎資料とすべく、子育て支援におけるe-ポートフォリオの効果や課題の有無を明らかにすることを目的とする。

II. 方法

1. 対象園及び対象者

ストーリーパークを導入している関東近県のインターナショナルスクール（A園）及びNPO法人が母体のマイクロスクール（B園）を対象園とした（表1）。調査対象者は、2園に通園している乳幼児・児童の保護者である。両園とも英語教育を積極的に推奨しているが、日本国籍以外の保護者は僅少である。当園によると日本国籍以外の保護者は、母国語の他に日本語を話し、読める、とのことであった。そのため、配布物等は日本語での表記にしている。このことを受け、本アンケートも日本語で表記している。

期間は、2018年2月から5月までである。ストーリーパークの導入期間は前年度当初からの導入のため、約9か月間使用している。途中入園児の保護者にも同様のアンケートを実施している。

なお、両園は入園児にストーリーパークに関する説明を受け、アプリをインストールしているため、在園の保護者は全員ストーリーパークを使用している現状にある。

表 1 園の概要

園の概要	特色・園児・児童数等
A 園	<ul style="list-style-type: none"> ・英語教育を重視したカリキュラムと子ども達が自発的にとりくみ、表現する力を育むことを重視した教育内容。 ・1～5 歳児で合計 158 名在籍。 ・ストーリーパークを毎日投稿している。
B 園	<ul style="list-style-type: none"> ・少人数・異年齢による「実体験に基づく探究」と「テクノロジーを活用した学習の個別化」を重視した教育内容。 ・3 歳～小学校 6 年生までで合計 39 名在籍。 ・ストーリーパークをほぼ 2 日に 1 回投稿している。

2. 調査方法

園長に依頼し、クラス担任から保護者にアンケートの概要を示した用紙と研究同意書を配布してもらった。概要を示した用紙に QR コードを記し、Google フォームによる WEB アンケートにした。保護者は、同意書をクラス担任に提出したうえでアンケートに入力した。

3. アンケート項目

アンケート項目は、①保護者の属性②利用による子どもや保護者の変化（25項目）、である。②は、「（1）変化はない（2）あまり変化はない（3）やや変化があった（4）変化があった」の 4 件法で尋ねた。また、ストーリーパークを見て「誰とどのような会話をしているか」についての自由記述欄を設けた。

4. 分析方法

4 件法で尋ねた回答は、統計的に処理をした。自由記述は、KJ 法によりカテゴリーに分類した。KJ 法を採用した理由として、ストーリーパークの活用を整理したり新しい発想を生み出したりすることに適していると考えたからである。KJ 法の分析単位は、1 センテンスを最小単位とした。1 人の回答者の記述において、同じカテゴリーが何度出現しても、そのカテゴリーの出現頻度は 1 と数えることとした。

5. 倫理的配慮

本調査の実施にあたり、園と保護者に向けて、調査の目的や内容・データ及び個人情報の取り扱い・研究発表予定を記した調査依頼文を配布した。保護者には、同意書に記入の上、提出してもらった。なお、本研究は、こども教育宝仙大学学術研究倫理委員会の承認を経て実施されており、利益相反は生じていない（承認番号19-0014）。

Ⅲ. 結果

1. 属性

対象者は、父親が15名（30%）、母親が35名（70%）であった。また、30歳代14名（28%）、40歳代31名（62%）、50歳代5名（10%）であった。なお、e-ポートフォリオの効果や課題の有無を明らかにする本研究の目的に鑑み、あえて一世帯につき1名と制限しなかった。したがって、利用者として送迎をしている対象者全員に依頼した。

2. 子どもの年齢

同一園に兄弟がいることを想定して複数回答を尋ねた。結果、1 歳児 4 名、2 歳児 3 名、3 歳児 9 名、4 歳児 8 名、5 歳児 10 名、小学校 1 年生 9 名、小学校 2 年生 7 名、小学校 3 年生 6 名、小学校 4 年生 9 名、小学校 6 年生 4 名であった。

3. 1 週間の閲覧頻度

1 週間におけるストーリーパークの閲覧頻度は、「毎日」が11名、「週1～2回程度」が27名、「週3～4回程度」が8名、「週5～6回程度」が3名、「全くしない」が1名であった。

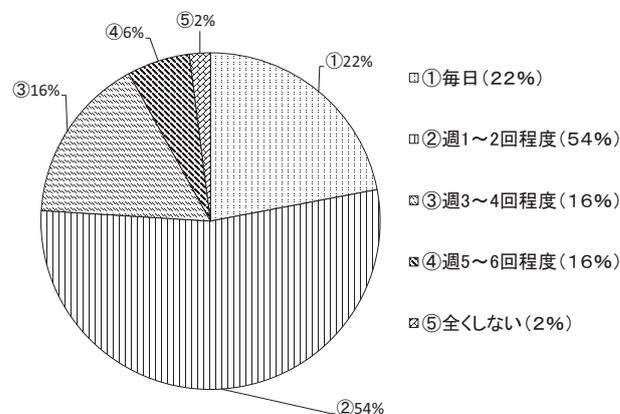


図 1 1 週間の閲覧頻度

4. 返信コメント

保育者・教諭からの投稿に際し、返信をする頻度を尋ねた。「ほとんどコメントしない」が17名(34%)、「時々コメントする」が15名(30%)、「全くしない」が18名(36%)、「毎回コメントする」が0名(0%)であった。

5. 利用者

ストーリーパークを利用している人を尋ねたところ、多い順に、母親45名、父親42名、祖母9名、本人9名、祖父5名、その他2名であった。

6. 利用媒体

ストーリーパークへの閲覧や投稿に際し、何を利用しているのかを尋ねた。スマートフォンが43名(86%)、パソコンが21名(42%)、タブレットが7名(14%)であった。

7. 利用場所

ストーリーパークを使用している場所を尋ねたところ、多い順に「自宅」43名、「勤務先」31名、「子どもの通う園・学校」7名、「その他」3名であった。

8. うれしい内容

保育者・教諭から子どもの発話や写真について、うれ

しいと感じる内容を尋ねた。多い順に、「自分の子どもの体験」が33名、「クラスの活動」が10名、「園・学校での行事」が2名、「他の子どもの体験」「先生からのコメント」が1名、その他が2名であった。

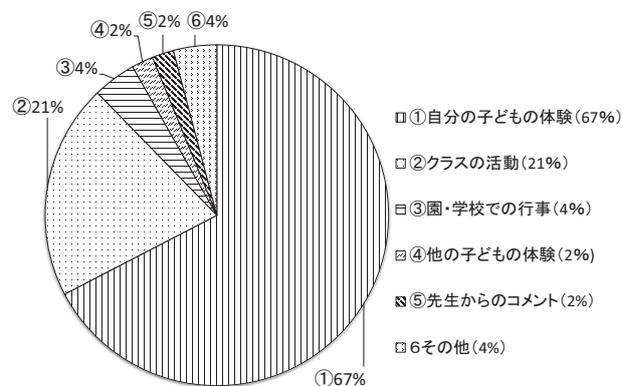


図2 うれしい内容

9. 会話の内容

ストーリーパークを見て、家庭内などの会話の内容について、KJ法をした(表2)。全部で33の記述が抽出された。多い順に、「夫婦間で共有して楽しむ」「その日の出来事を振り返る」「日常的に子どもとコミュニケーションを図る」「親族に子どもの成長を報告する」「家族みんなで楽しむ」「保育者・教諭と子どもの学びを振り返る」であった。

表2 家庭内などの会話の内容

カテゴリー	記述内容の例
「夫婦間で共有して楽しむ」	・主人(父)とスクールの様子について気軽に会話しています。(3歳・4歳・小2、母親) ・夫婦でこんなことあったんだね～と話しています。(小6、母親)
「その日の出来事を振り返る」	・娘と写真を見てその時の話を聞いている。(小4、父親) ・子供と出来事を振り返りながら会話する。(5歳・小2、母親) 他11記述
「日常的に子どもとコミュニケーションを図る」	・毎日のように、写真内容について会話します。(3歳児、母親) ・子供と今日の園での内容を話す。(1歳・5歳、母親) 他3記述
「親族に子どもの成長を報告する」	・両親、離れて住んでいる祖父母と園での様子や着ている服等について話している。(1歳、母親) ・帰省時に私たち夫婦や子供達が両親(祖父母)に対して、成長の記録や活動報告をする際に活用。(5歳、小2、母親) 他2記述
「家族みんなで楽しむ」	・ほぼ毎日、主人と子供と3人でその日に行ったことについて話す(4歳、母親) ・家族同士で学校の活動でどんな様子だったかを話す。(4歳・小1、母親) 他2記述
「保育者・教諭と子どもの学びを振り返る」	・記事を投稿してくださる先生や、コメントを記載している保護者と記事の内容について。(3歳・5歳・小4、母親) ・先生と授業その他の活動の学びについてシェアする。(小2、母親) 他1記述

10. カテゴリー別の子どもの割合

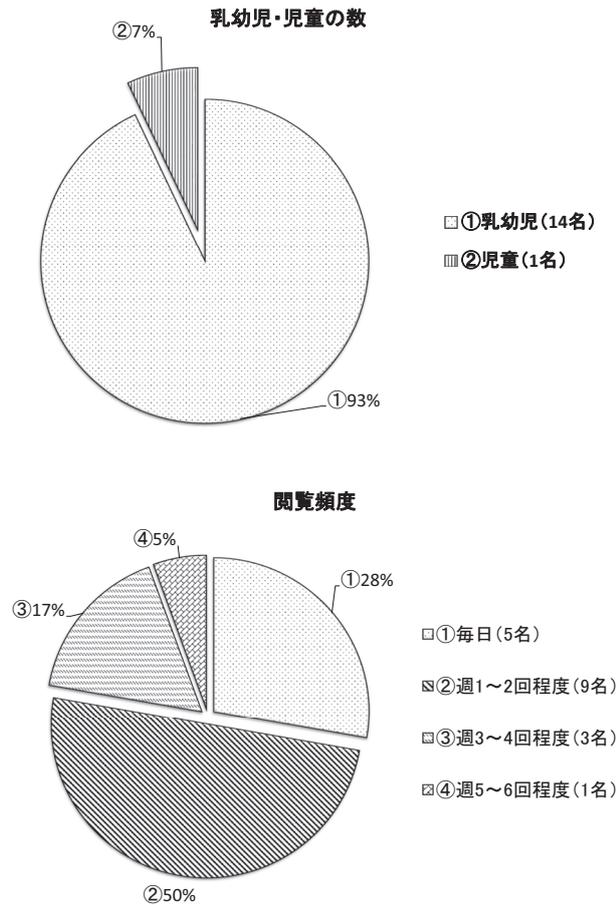
カテゴリーごとの乳幼児（1～5歳）と児童（6～12歳）の割合および閲覧頻度は以下の結果となった。

乳幼児と児童の割合は、「夫婦間で共有して楽しむ」が乳幼児14名であるのに比して児童は1名であった。そ

の他のカテゴリーはほぼ同数であった。

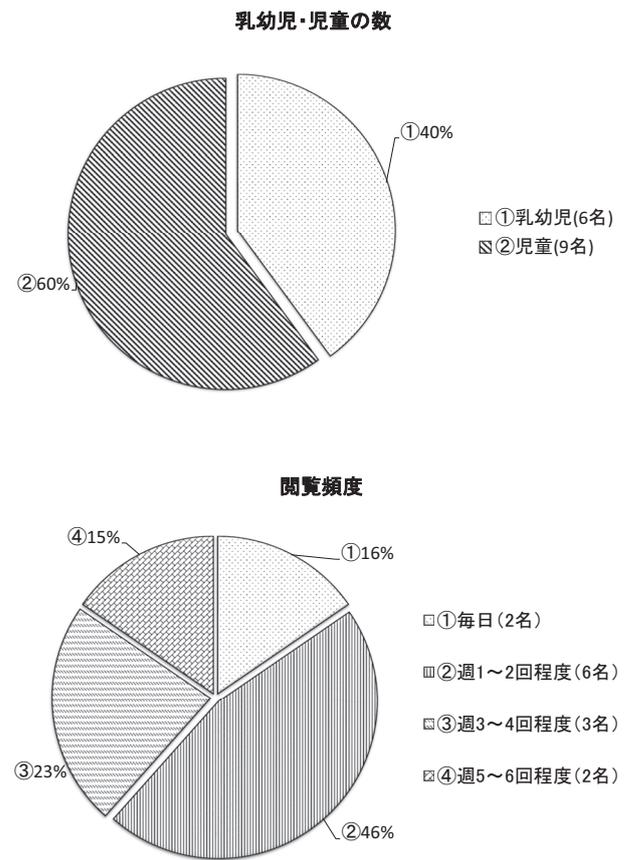
閲覧頻度は、「夫婦間で共有して楽しむ」「その日の出来事を振り返る」「日常的に子どもとコミュニケーションを図る」は、頻度に関係なく行っていることがわかる。

①「夫婦間で共有して楽しむ」



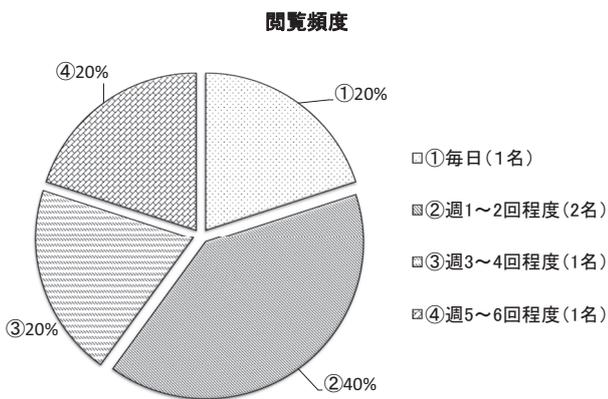
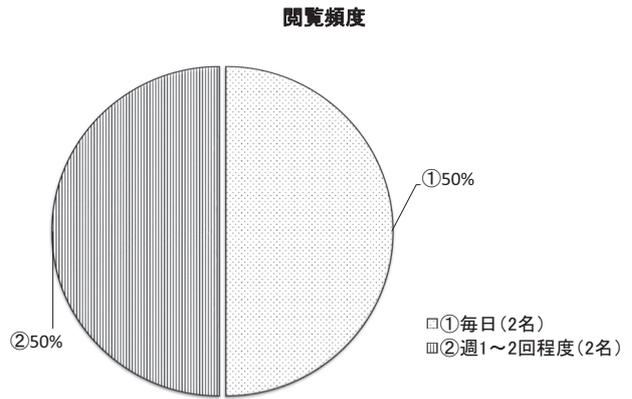
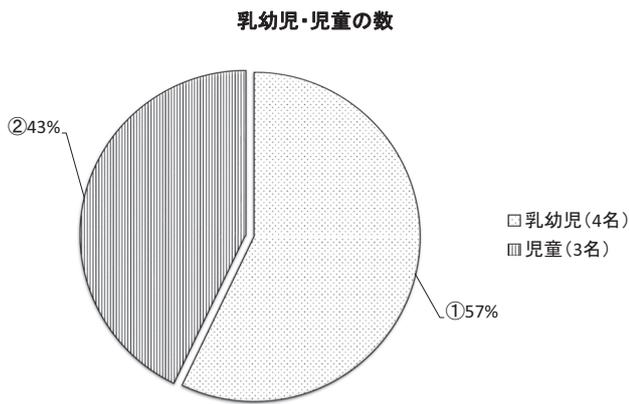
乳幼児の割合が多く、夫婦で子どもの話題を共有していた。児童が1名と少なかった。閲覧は、頻繁に見ているというよりは週に1～4回程度であった。

②「その日の出来事を振り返る」



年齢を問わず、平均的に閲覧をしていた。週1～2回程度の閲覧が最も多かった。

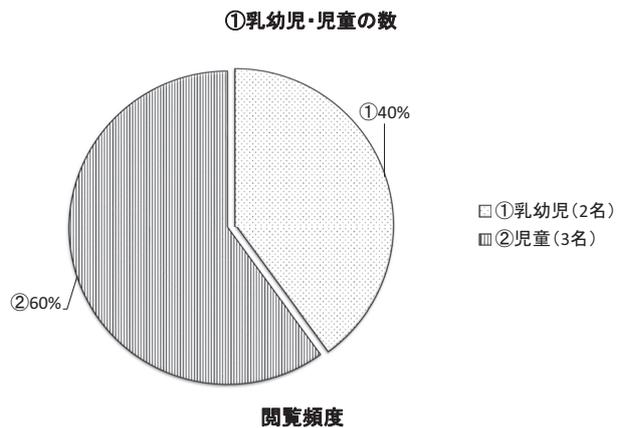
③ 「日常的に子どもとコミュニケーションを図る」



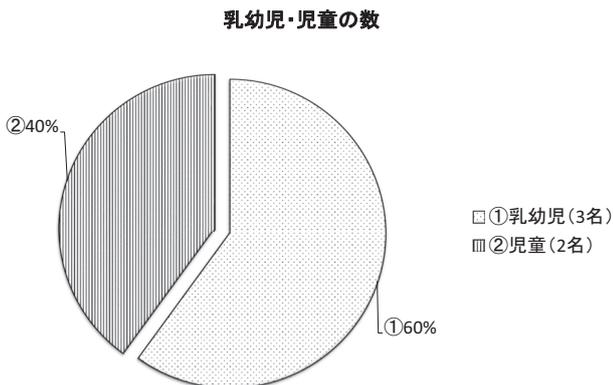
親族に報告をしている保護者は、乳幼児・児童の保護者共にほぼ同数であった。また、閲覧を毎日している保護者と週1~2回程度の保護者であるが、閲覧頻度に関きがあった。

⑤ 「家族みんなで楽しむ」

乳幼児・児童を問わず、双方の保護者が子どもとコミュニケーションを図っていた。閲覧は、頻度に関係なくコミュニケーションを図っていた。

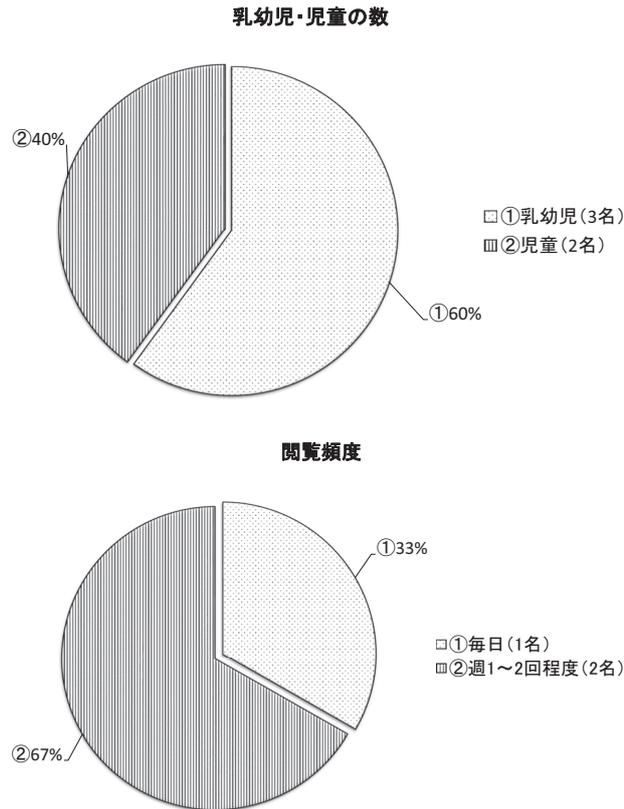


④ 「親族に子どもの成長を報告する」



家族みんなで楽しんで閲覧をしている保護者は、乳幼児・児童共にほぼ同数であった。また、④「親族に子どもの成長を報告する」と同様、閲覧に関きがあった。

⑥「保育者・教諭と子どもの学びを振り返る」



閲覧などを通して、保育者・教諭と学びについて振り返る保護者は、乳幼児・児童でほぼ同数であった。また、毎日閲覧している保護者と週1~2回程度閲覧している保護者がいた。

11. ストーリーパークの利用による変化

①保護者による子どもへの関わりや見方の変化に関する項目

「自分の子どもの成長を喜べるようになった」は、「変化なし」が7名(14%)、「あまり変化なし」が6名(12%)、「やや変化があった」が22名(44%)、「変化があった」が15名(30%)であった。利用を通して、成長を感じている保護者は74%と多かった。次に、「自分の子どもをほめる機会が増えた」は、「変化なし」が3名(6%)、「あまり変化なし」が6名(12%)、「やや変化があった」が15名(30%)、「変化があった」が26名(52%)であった。ほめる機会が増えたと感じている保護者が、全体の82%であった。

「自分の子どもをかわいいと思えるようになった」は、「変化なし」が17名(34%)、「あまり変化なし」が7名(14%)、「やや変化があった」が11名(22%)、「変化があった」が15名(30%)であった。愛情が強くなった保護者は半数以上であった。

「自分の子どものできるところを見つけられるように

なった」が5名(10%)、「あまり変化なし」が6名(12%)、「やや変化があった」が15名(30%)、「変化があった」が24名(48%)であった。「自分の子どもの新たな一面を見つけられるようになった」は、「変化なし」が3名(6%)、「あまり変化なし」が5名(10%)、「やや変化があった」が19名(38%)、「変化があった」が23名(46%)であった。この2つの項目から、利用を通して肯定的な面をみようとする保護者は約70%以上であった。

②人的環境の変化に関する項目

(i) 相談相手に関する項目

「子育ての悩みを他の保護者に相談できるようになった」は、「変化なし」が24名(48%)、「あまり変化なし」が13名(26%)、「やや変化があった」が5名(10%)、「変化があった」が8名(16%)であった。「子育ての悩みを親戚(祖父母等)に相談できるようになった」は、「変化なし」が27名(54%)、「あまり変化なし」12名(24%)、「やや変化があった」6名(12%)、「変化があった」5名(10%)であった。「子育ての悩みを園(学校)の先生に相談できるようになった」は、「変化なし」が16名(32%)、「あまり変化なし」が16名(32%)、「やや変化があった」が7名(14%)、「変化があった」が11名(22%)であった。

利用を通しての相談相手の広がりや相談回数に変化はなかった。

(ii) コミュニケーションに関する項目

「園(学校)での出来事について、親戚(祖父母等)と話す機会が増えた」は、「変化なし」が13名(26%)、「あまり変化なし」が7名(14%)、「やや変化があった」16名(32%)、「変化があった」が14名(28%)であった。「園(学校)での出来事について、園(学校)の保育者・教諭と話す機会が増えた」は、「変化なし」が10名(20%)、「あまり変化なし」が9名(18%)、「やや変化があった」が16名(32%)、「変化があった」が15名(30%)であった。

親戚や保育者・教諭などと話をする機会は、いずれも増えてきていることがわかった。③教育・保育内容に関する項目

「園(学校)での普段の活動の様子がよくわかるようになった」は、「変化なし」が1名(2%)、「あまり変化なし」が2名(4%)、「やや変化があった」が5名(10%)、「変化があった」が42名(84%)であった。

「子どもに対する担任の先生の考え方がよくわかるようになった」は、「変化なし」が4名(8%)、「あまり変化なし」が8名(16%)、「やや変化があった」が18名(36%)、「変化があった」が20名(40%)であった。

利用を通して、園や学校での活動の内容や意図が保護

者に伝わっている現状が浮かび上がった。

IV. 考察

1. 閲覧とコメントの実情

閲覧頻度が最も多かった回数は、「週1～2回程度」(54%)であった。閲覧場所や時間をと問わないツールではあるものの、こまめに確認をしていない現状が浮かび上がった。また、閲覧後の返信についても「ほとんどコメントしない」「時々コメントする」が64%であることから投稿への返信を毎回している保護者は少ないことがわかった。

ストーリーパークは写真や子どもの発言、保育・教育中の子どもの姿などが可視化される点に特徴があるが、保護者がそれらをどのように受け止め、保育者・教諭へどのように返信するのかがスムーズにできにくい面があると考えられる。連絡帳ではあるが、丸目(2016)によると、連絡帳記入に際して、応答のない保護者が全体の約35%に見られた。

さらに考察で、「育児に慣れておらず記述する時間がない」「育児に疲れて記述ができない」「育児への関心が薄く記述の必要性を感じない」など様々な理由が考えられる、と指摘している。

一方、後述するように閲覧頻度が低く、コメントの返信が少なくとも、子どもとの関係性の変容や保育者とのコミュニケーションの促進も生まれている。つまり、頻度は低くとも子どもに関わる人々の間でともに子どもの育ちを支えるという面においては少なからず寄与していることが考えられる。この点は、連絡帳のように個々の家庭に向けた発信ではなく、全体的な発信でかつスマートフォンでいつでも閲覧できるという側面が影響しているのではないだろうか。保護者にとっては、ストーリーパークをコミュニケーションツールというよりは、子どもの育ちを確認するツールと捉えているかもしれない。その点については、コミュニケーションの側面を強調することによって、閲覧頻度とコメントの向上は促される可能性があると思われる。

2. 保育の可視化の重要性

閲覧をしてうれしい内容の上位に、「自分の子どもの体験」「クラスの活動」があり、2つの合計が88%であった。さらに、「園(学校)での普段の活動の様子がよくわかるようになった」の質問には、「変化があった」が84%であった。子どもが園・学校でどのように過ごしているかなどの情報は、保護者にとって安心材料であったり、得たい情報であったりすると予想される。このことを踏まえると保育者・教諭は、子どもの学びをわかりや

すく保護者に発信する必要があると考えられる。

ドキュメンテーションやポートフォリオなどの記録媒体を使用し、子どもの学びの姿を発信することで、保護者が園での子どもの活動を理解するだけでなく、子どもの成長を実感することや園の保育を理解することにもつながるという報告がある(那須, 2014)。ストーリーパークには、日常的な子どもの姿を言葉や写真で閲覧できる。そのため、保育者・教諭の意図をくみ取りやすいメリットがあり、また活動に連続性がある内容であれば時系列で成長を実感できると考えられる。本研究結果でも、成長を感じていると答えた保護者は74%と高い数値であった。ストーリーパークを利用することで、「活動を可視化し、それに対してコメントをする」、というプロセスが生まれ、保護者も成長を実感できるようになったのではないだろうか。

3. 関係性の変容

ストーリーパークを利用してからほめる機会が増えたと感じている保護者は、82%であった。また、「自分の子どもをかわいいと思えるようになった」と答えた保護者は52%、「自分の子どものできる場所を見つけられるようになった」と答えた保護者は78%であった。これは、保護者が先に述べた成長した姿を実感することを通して、子どもの実態を把握することができ、子どもの「今」を捉えることができた結果、肯定的な評価をすることにつながったと考えられる。松本(2008)によると、育児書を読む理由として「発達のめやす」と答えた保護者が48.7%であった。つまり、保護者はわが子の成長について見通しをもって把握したいという思いがあると考えられる。

ストーリーパークを利用することで、保護者が①成長を把握する②発達の見通しをもつ③育児や成長への不安が軽減する④子どもに肯定的な眼差しがうまれる、という好循環が生じていると推察される。また、子どもも保護者から肯定的な評価を得ることができるので、安心して自己を表出していると推測される。ストーリーパークの利用は、子ども—保護者の関係が相乗的に高まっているのではないだろうか。

4. コミュニケーションの促進

「園(学校)での出来事について、園(学校)の保育者・教諭と話す機会が増えた」の質問に、「やや変化があった」「変化があった」と答えた保護者は62%であった。守・齊藤(2019)は、保育者96名を対象に保護者支援に関する質問紙を実施した。「過去5年において保護者への接し方で難しいと感じたことがある」と答えた保育者は94.7%、また「現在と新任の頃の保護者のニー

ズが変化したと感じたことがある」と答えた保育者は 81.2%であった。これらのことは、関わりが難しいと感じる保護者が多数存在することと日に日に保護者との関わりが難しくなっていることを示している。

保護者との関係構築には、コミュニケーションが不可欠である。コミュニケーションの質や回数などが関係構築に影響を与えると捉えると、ストーリーパークの利用によってコミュニケーションが促進され、関係構築に好影響を与えたと考えられる。保育経験年数の長さによらず、あらゆる年代の保育者が保護者対応上の困難を抱えている(成田, 2012)という現状を鑑みると、ストーリーパークを利用する保育者側のメリットは少なくないと考える。

V. 今後の課題

最後に、本研究の課題として次の3点を挙げる。

第1に、ストーリーパークの共同作成者である保育者・教諭の意識や意図といった作成における姿勢などが含まれていない。今回は、利用に際する保護者の現状を明らかにすることを目的としたが、共同作成者であり、情報の始発者であることが多い保育者・教諭にもたらされた効果を含めることでより深い考察が得られると思われる。第2に、対象者についての課題である。本研究に協力頂いた保護者は、ストーリーパークの利用に一定程度メリットを感じている保護者であると予想される。裏を返せば、非協力的な保護者はメリットを感じていないことが予想される。さらに、一世帯の回答者が複数であることも予想され、「兄弟を通わせている家庭＝園の取り組みであるストーリーパークを肯定的受け止めている家庭」と推測される。今後は、実態を詳細に把握するため幅広く対象者を募りつつ、一斉帯あたりの回答者を限定する必要がある。第3に、A園とB園ではコメントを投稿する頻度に違いがあると考えられるが、今回は合算した結果を示した。そのため、利用状況に若干の違いが生じていてもデータとして浮かび上がってこない。

日本の保育現場における e-ポートフォリオに関する研究はほとんどないため基礎的資料として一定のデータを求めることができたが、厳密なデータ収集を目指すのであれば同一条件化での研究が求められる。

注1：ストーリーパークは、ニュージーランドの株式会社 Storypark 社 (175 Victoria Street, Te Aro, Wellington 6011 NZ) で開発され、国内では株式会社グローバルパートナーズ (〒164-0004 東京都中野区中野 2-13-26-202) が総代理店になって開発・販売されている e-ポートフォリオソフトである。

文献

- 諏訪きぬ (2014) 子育て支援 (総説) 保育学研究52, 3, 4-8
- 橋川喜美代 (2014) 保育記録から見た学びの生成と保育者の共感的見守り: テ・ファリキとラーニング・ストーリーを通して. 兵庫教育大学研究紀要 45, 19-29
- Carr, M., Assessment in Early Childhood Settings, ; Learning Stories, SAGE Publications, 2001, p96. マーガレット・カー著、大宮勇雄・鈴木佐喜子役「保育の場で子どもの学びをアセスメントする: 「学びの物語」アプローチの理論と実践」ひとなる書房, 2013年, 160-161
- Carr, M., May, H. & Podmore, V. N.(2000) Learning and Teacher Stories: Action Reseach on Evaluation in Early Childhood. Final Report to the Ministry of Education. Wellington: New Zealand Council for Educational Reseach
- 七木田敦・ジュディス・ダンカン編著 (2015) 「子育て先進国」ニュージーランドの保育歴史と文化が紡ぐ家族支援と幼児教育. 福村出版. 111
- 丸目満弓 (2016) 乳児保育における新たな保護者支援研究～連絡帳をツールとして～. 大阪総合保育大学大学院博士論文
- 那須信樹 (2014) 幼稚園における日常的な保育実践の可視化による「子育て支援」の実際—在園児保護者との日常的な連携を中心に—. 保育の実践と研究18, 4, 14-28
- 松本昌子 (2008) 育児書など育児情報の利用状況. 小児保健研究 67 (3), 525-530
- 守巧・齊藤崇 (2019) 保育者による保護者支援における実践内容の実態—保護者支援から子育て支援に向けての基礎的研究. 保育文化研究第9号, 29-39
- 成田朋子 (2012) 保護者対応に求められる保育者のコミュニケーション力. 名古屋柳城短期大学研究紀要34, 65-76

